

一矢、晴を貫く

——史書『皇明通紀』と歴史小説『英烈傳』の語り——

川 浩 二

はじめに

明の太祖朱元璋は漢の劉邦以來、といわれる貧しい生まれから元末の亂世に頭角を現し、陳友諒、張士誠といったライヴァルたちを倒し、ついに元の順帝を北に逐って中原を統一した。その出世物語は早くより諸書に記され、民間における娛樂の素材としても注目されていたと考えられる。

そして明朝も嘉靖代に至り、すでに史書では『皇明——』と名をつけ、あるいは國初の元勳を論じあるいは當世までの通史を書く一群の書物が出版されている頃、世に出たのが小説『英烈傳』である。『英烈傳』は、それが實のところどれほど讀まれていたかはおき、登場するとすぐに筆記にその存在が書き残されるようになった。

その嚆矢は嘉靖四五年（一五六六）に刊刻された鄭曉の『今言』である。

嘉靖十六年（一五三七）丁酉、郭勛 其の立功の祖、武定侯英を太廟に祀ることを進めんと欲し、乃ち『三國志』俗説及び『水滸傳』に倣ひて『國朝英烈記』を爲り、（張）士誠を生擒し（陳）友諒を射死するは皆英の功と言へり。⁽¹⁾

ここに書かれるのは『國朝英烈記』なる書物にすぎず、『英烈傳』ではないが、この後に書かれる筆記等では同じ記事⁽²⁾を採ってすべて『英烈傳』とする。⁽³⁾

『英烈傳』はこのように武定侯郭勛（？—一五四二）が己の

先祖の功績を讃えるため、朱元璋に仕えた郭英の活躍を書いた作品、とされてきた。郭勛は沈德符の『野獲編』に『水滸傳』の出版を行った、と書かれ、また書目に『三國演義』や『水滸傳』の「武定版」が著録されることから、小説史上に大きな位置を占める人物である。そして一方、皇帝のおぼえめでたく出世をきわめ、それを成し得た人物の例にもれず轉落して一生を終えた、嘉靖前半の政争の中心でもあった。そのためなおさら、さまざまな書はこれを記したのである。

だがこの説は小説『英烈傳』の創作に關する記述であり、それ自體の當否について検討が必要なることはもちろん、我々のもとにある書物としての、またテキストとしての『英烈傳』と名づけられた小説との關係については検討を要する。

本論は、嘉靖代に出版されたといわれる『英烈傳』の姿がいかなるものであつたか、について検討を行うものではない。また、それと郭勛との關わりについても検討の對象とはしない。本論が行うのは、書物として現存する歴史小説『英烈傳』と、その周邊に存在する諸書が、何を、いかなる手法で書くうとしているのか、という問題に對する分析である。そしてそこから明らかにされるのは「本來の」小説『英烈傳』の姿、ではなく「現存の」小説『英烈傳』の姿であらう。

『皇明通紀』と『皇明英烈傳』

本論は「史書『皇明通紀』と歴史小説『英烈傳』の語り」と題した。まず後から題を解くが、ここでいう語りとはある事象を「いかに」表現するか、ということにすぎない。そしてある事象、とは本論においては朱元璋およびその他の登場人物、その時代に關することを指す。⁽⁴⁾

われわれが現在見る『英烈傳』と呼びうる一群の小説は、萬曆から崇禎にかけて一時に異なる版本の登場を見た。現在目睹しうる版本のうち、内閣文庫所藏の『新鐫龍興名世錄皇明開運英武傳』八卷六十則は最も古い刊年、萬曆十九年（一五九一）の記載を持つ。⁽⁵⁾ この書が少なくともこれ以降の出版であることは疑いない。

さらに萬曆四四年（一六一六）刊とされる『京本雲台奇蹤』をはじめとする『雲合奇蹤』系と呼ぶべき諸本も出版され、それらは清代以降も續いた。小説は既存の藝能にも影響を與えながら、朱元璋は説唱藝能や戯曲に主人公として登場するのである。⁽⁶⁾ またわが日本においては『水滸傳』の譯者でもある岡島冠山によって『通俗皇明英烈傳』の名で寶永二年（一七〇五）に翻譯されている。⁽⁷⁾

今回、その中で中心的に取り扱うのは『新刻皇明開運輯略武功名世英烈傳』と題される書である。本論では『皇明英烈傳』と簡稱する。六卷六十則⁽⁸⁾。

この小説『皇明英烈傳』は大きくいって太祖の起兵から金陵（南京）の奪取、江西に據った漢王陳友諒との戦い、蘇州を據点とした吳王張士誠との戦い、北伐から大都（北京）の占領、そして四川や雲南の討伐に至って全巻を終える。

一讀してその特徴を見ようとすれば、たちまち氣づくのが文中にしばしば他書が引用されることである。特に注目すべきは「原本英烈傳」、「舊本英烈傳」という名で先行の小説の存在が示されること、⁽¹⁰⁾『皇明通紀』なる書をはじめとする史書が引かれることである。巻頭を見れば、各五則づつの單元ごとに「起元順帝至正元年辛巳歲至元順帝至正五年乙酉歲首尾凡五年事實」などと紀年が入り、五則ぶんの目録が記される⁽¹¹⁾。その後に見えるのが『皇明通紀』の名である⁽¹²⁾。さらに『皇明通紀』は全體にわたってしばしば引用が示され、その数は他の資料を壓倒し、引用も正確である⁽¹³⁾。

しかし前述の『新鐫龍興名世錄皇明開運英武傳』、本論では『英武傳』と呼ぶ、では状況が異なる。他の部分でも主に文中に挿入される詩や駢語が『英武傳』の方が多い、などの

違いはあるが、それより大きな差異は『皇明英烈傳』に見られる『皇明通紀』の文字が『英武傳』に見られないことである。あるいはその文字のみ見えず、あるいはそれを含む注文ごと存在しないものもあり、また同じ部分が「按皇明通紀」から「按史臣論曰」となっていたり、他資料の名が記される部分もある。基本的には文を同じくする『英武傳』と『皇明英烈傳』のうち、この『皇明通紀』の扱いははっきりと異なるのである。

では、この『皇明通紀』とはいかなる書物であろうか。こちらは小説『英烈傳』と違い、その版刻に至る過程ははっきりしている。嘉靖三十四年（一五五五）刊の『皇明資治通紀』の序に、著者たる陳建がその由來を語っている通り、先んじて嘉靖三十一年（一五五二）に完成した『皇明啓運錄』は専ら太祖朱元璋の時代について通時的に著述した書物であり、その後ろに正徳年間までの記述を足して完成したのが『皇明通紀』であった⁽¹⁵⁾。

陳建（一四九七—一五六七）は廣東東莞の人で、官僚としては恵まれた境遇を持ちえず、後年は著述に専念した。『皇明通紀』はその代表的な著作である。

嘉靖から隆慶をはさんで萬曆、さらに崇禎に至る時代は、

明一代の歴史、國初のみならず同時代まで、に關する書物の出版が隆盛した時期であつたが、『皇明通紀』は中でもさかんに出版されたものの一つである。嘉靖の出版のち隆慶五年（一五七二）に禁書とされながら、萬曆、崇禎を経てその出版は止むことはなく、あまたのヴァリアント、續書、類似的の書物を生み出した。⁽¹⁶⁾

こうした状況からしてみれば、明の開國を書いた小説『英烈傳』がいづれかの時點で『皇明通紀』を参照することは當然の成り行きであつた。⁽¹⁷⁾

本論は以上をふまえ、史書『皇明通紀』の記述と、その影響を直接受けた歴史小説『英烈傳』における記述を比較し、他の同時期を書く史書や筆記も合わせつつ、雙方のテクストにおける語りについて考察を加え、もつて現存の『英烈傳』諸本の制作と展開について考えるものである。

鄱陽湖の戦い

小説『皇明英烈傳』の大きな山場は陳友諒、張士誠の二人との戦いであるが、なかんづく陳友諒との鄱陽湖上の大戦はクライマックスと呼ぶにふさわしい。

本節では、『皇明英烈傳』第三十三則にあたる「王禕獨作

秋江賦 太祖一戰鄱陽湖」から第三十六則「太祖三戰鄱陽湖 郭英箭射陳友諒」までの展開を追い、『皇明通紀』の記述との比較を試みる。

ここで検討の對象として鄱陽湖の戦いを選んだ理由は『今言』をはじめとする『英烈傳』に關する言説が必ずといってよいほど「射死友諒」と取り上げる部分であること、また小説『皇明英烈傳』が特に詳細に書く場面であること、同じくこの場面を詳細に書く史書が多いこと、と挙げられるがいづれも恣意的なものである。とまれ以下に煩をいとわず梗概を記す。なお文中の番號は特に後の『皇明通記』と對應する部分、アルファベットは特に『皇明英烈傳』が『皇明通記』とは離れた記述を見せる部分である。

『皇明英烈傳』

第三十三則「王禕獨作秋江賦 太祖一戰鄱陽湖」

至正二十三年秋七月中旬、朱元璋は大軍を發し、陳友諒は牛渚渡から水軍を進めた（1）。このときすでに陳友諒はもと據つていた江西を朱元璋に攻め取られ、湖北・湖南を本據としていた。

兩軍は康郎山のふもとに陣を敷き、交戦のかまえを取る。

前哨戦は朱軍の元帥徐達が兵を率いて敵に当たり、少しく勝を収めると朱元璋は徐達を金陵の守備に當たらせるため歸させた(4)。

翌日、朱軍は徐達に代わって常遇春が先頭に立ち戦闘が始まると、戦況はしばらく動かず、朱軍の俞通海の火計がわずかに効果を上げた程度であつた。一進一退のすえ陳友諒はいったん兵を退く。

翌日、常遇春はさらに交戦、漢將張定邊を陣頭で射る(2)。そのまま先陣に留まり、やがて順風に乗じて火薬を用い、有利に立つ。朱軍の廖永忠が陳友諒を船上に討ち取ったか、と見えたが、これは弟陳友直であつた。この日の夜、朱軍は俞通海の建言によりさらに夜戦をしかける。小勢で大いに戦果を上げて歸る途中、追う漢軍の陳友仁を郭英が迎え、返り討ちにした(6)。

第三十四則「太祖二戰鄱陽湖 韓成替死馬家渡」

陳友諒はこの敗北により、戦艦を鐵鎖を用いてつなぎ堅牢な水陣を張ることで對抗した(5)。

さらに陳友諒は自ら兵を率いて陣から攻め出した。常遇春がこの攻撃を撃退すると、陳友諒は少しく退き、體勢を整える。しかしそのとき朱元璋の乗船が馬家渡の淺瀬で大

一矢、晴を貫く(川)

風に吹き上げられ、動きが取れなくなった(3)。陳友諒の配下、陳英傑は急進して朱元璋の乗船を圍み、降伏を説く。窮地に陥る朱元璋に、同乗の臣下韓成が策を獻ずる。

自ら身代わりとなって自決し、時の猶豫をかせぐという。韓成は朱元璋の衣冠を身につけて湖中に入り、陳英傑は攻撃の手を緩める。そこに常遇春の軍艦が到着し、朱元璋は難を逃れた(7)。朱元璋、陳友諒に親書(8)。俞通海、川に入り敵の上流から攻め下ることを建言(10)。

翌日、交戦は續き、朱軍は俞通海、郭英をはじめとする六將の快船が敵を突破、背面に展開して戦を有利に進める(9)。そして朱軍の張興祖が陳友諒を討ち取ったかに見えた。

第三十五則「丁普郎詐降友諒 劉伯溫設計焚寨」

しかし陳友諒に見えた相手は、今度は次男の陳道であつた。

その翌日、張士誠との戦いに指揮を取っていた劉基が勝を収めて合流、陳友諒が張った難攻の船陣を破るべく、策を授ける。それは以前漢より下った丁普郎らを陳友諒のもとに戻らせ、内應して攻撃をしかけるというものであつた(A)。決死の策に踊らされた陳友諒は丁普郎を容れ、そこから得た情報どおり右腕とたのむ張定邊を常遇春の迎撃に

向かわせる。

第三十六則「太祖三戰鄱陽湖 郭英箭射陳友諒」

翌日、八月壬戌の日、日暮に至って朱軍は出發し、劉基は天に祈って風を呼ぶ（B）。敵陣の外からは火砲を放ち、内からは丁普郎らが火をつけ、ついに夜半の戦いで船陣を破り、丁普郎は壯絶に戦死する（12）。薄明の中、陳友諒は船で脱出を試みるが、本據武昌に通じる河口には郭英、康茂才らが待ち伏せしていた（C）。一方朱元璋は後方で戦況を眺めていたが、劉基が急に乗艦を換えることを建言、移動の後、敵砲によりもとの乗艦が撃沈される（11）。陳友諒の配下、張定邊は陣頭に立つ郭英に矢を放ち、郭英の左腕に當たるが、郭英はこらえて射返し、その矢は陳友諒の右眼を貫き、ついに陳友諒は倒れる。軍を收め、朱元璋の前に立っても自らの功績を言わない郭英に、康茂才は腕の傷を證としてその功を獻ずる。郭英は朱元璋の天威によって勝ったのであり、自らの力ではない、と答え、朱元璋はますます喜び、恩賞を與えて戦勝を祝った（D）。

鄱陽湖の戦いは『皇明英烈傳』においては以上のように展開するが、それが『皇明通紀』ではいかに語られているであ

ろうか。

『皇明通紀』

通史部分

至正二十三年七月丙戌、陳友諒、鄱陽湖へ向かう（1）。

丁亥、康郎山で朱元璋軍と會う。

戊子、兩軍、交戦。徐達、常遇春らは奮戦、火計を仕掛けて効果を上げ、常遇春、漢將張定邊を射る（2）。朱元璋の乗艦が淺瀬に乗り上げ、張定邊が朱元璋の船に突撃するが常遇春が撃退（3）。朱軍俞通海の追撃。この日徐達を金陵に戻らせる（4）。

己丑、戦艦を連ねて陣を張る陳友諒（5）。これに對し朱軍は郭興が火計を建言。東北の風によって計略は當たり、陳友諒の弟陳友仁、陳友貴ら陣没（6）。

庚寅、朱軍の廖永忠ら六將の船が敵を突破、背面に展開。戦を有利に（7）。

辛卯、戦いの末、陳友諒は保鞋山まで兵を退こうとするが阻まれて留まる。

相對すること三日。朱元璋、陳友諒に親書（8）。朱軍俞通海、川に入り敵の上流から攻め下ることを建言（9）。

さらに軍師劉基の提案により「金木相犯日」に勝敗を決することに。

八月八日、朱軍は敵を包圍して動きを封じる。漢軍、補給を断たれ軍餉盡く。

八月二十七日、漢軍、包圍を突破しようと試み、陳友諒、追撃される中で流矢に當たつて陣没。長子陳理、張定邊らとともに武昌に退却。

補遺部分

朱元璋、陳友諒による南昌の包圍を聞き、廬州の圍みを解き、鄱陽湖へ出發する際の劉基との對話。

鄱陽湖の戦での危機。戊子から庚寅の後、韓成の身代わりによって脱出(10)。

劉基、朱元璋に乘艦を變えることを建言。移動の後、敵砲によりもとの乘艦が撃沈(11)。

丁普郎らの陣没(12)。

周顥の予言。

『皇明通紀』でもこの部分は七月丙戌から辛卯までの六日間を一日ごとに記述しており、激戦を記すにふさわしい。その後包圍戦に入り、漢軍が食料が盡きて敗れるまで、戦いは

一矢、晴を貫く(川)

一月あまりに及んでいる。ちなみに『皇明英烈傳』が言う「八月壬戌」は曆によれば八月二十六日である。『皇明通紀』との一日の差が曆によるものかいづれかの記述の問題かはおき、ほとんど同じ意識を持っていることはうかがえよう。

『皇明通紀』のこの部分の記述はもっぱら陳友諒討伐を書いた、ほぼ同時代の童承鉞『平漢錄』などに比しても全體に詳しく、後述の例もふくめ、複数の資料の組み合わせからなっていると考えられる。

各部分にふつた番號が示すとおり、『皇明通紀』と『皇明英烈傳』では戦の展開の順序が異なる。それには『皇明英烈傳』が史實から離れて追つた小説における展開の論理が働いていることは確かであるが、部分的に『皇明英烈傳』がより通時的に記述を進めている部分があることもわかる。

『皇明通紀』の(10)、(11)、(12)の部分を見る通り、この書は時に完全な紀年體で文を進めることを失う部分が見られる。これは先に確認した通り、『皇明通紀』の朱元璋に関する記述の部分は『皇明啓運錄』と題した異なる書物であったことも原因の一つであろう。

劉基の予言による乘艦の移動、丁普郎をはじめとする臣下の戦死については、それが戦の中のどの時期に起こったのか

を記さず、韓成が朱元璋の身代わりになったことについてはその前の(3)で状況を設定して戊子の日としているにも関わらず、(10)では「戊子至庚寅三勝之後」と書く。この矛盾の原因は、韓成に關する記述に、黄金『皇明開國功臣錄』もしくはそれに連なる資料を引用しているためである。⁽¹⁸⁾

ちなみにこれは鄱陽湖の戦いの中でもよく伝えられた部分であり、後に編まれた代表的な編年體の史書『明通鑑』は通時的にこれを記述する。

そして『皇明通紀』と『皇明英烈傳』が鄱陽湖の戦いを書くについて異なるもっとも大きな場面といえ、郭英が陳友諒を射殺す箇所(D)に盡きる。

これこそ、『英烈傳』、『皇明英烈傳』ではなく、なる書物が持つ大きな特徴であり、それが政治的な言説にたびたび取り上げられる主因ともなってきた部分であった。しかし、この部分は少なくとも『英烈傳』の著者とされる郭勛の純然たる創作ではない。嘉靖より後の文獻においては『英烈傳』がその淵源のように言われているが、陳友諒を討ったのが郭英の放った一矢であった、という説、むしろ傳説と呼ぶべきだろうが、は嘉靖代に先んじて存在する。

已にして友諒、流矢に中りて死するを、英の功と言ふ者有り。上之を問ふに、英曰く、「天威神算にして、臣何の力やあらん焉」と。上益ます之を重んず。

これは先に引いた『皇明開國功臣錄』の記述である。⁽¹⁹⁾ 撰者黄金は弘治代に原書を書き、正徳刊本が現存する。明らかに『英烈傳』が言説に上り始めた時期より早い。

いっぽう、『皇明英烈傳』はこういう。

太祖朱元璋は軍をおさめて川岸に上がり、陣幕を張って座した。諸將がそれぞれ軍功を奏上する中、郭英だけは陳友諒を射殺したことを黙っていた。郭英が陳友諒を射落としたとき、他の將軍たちは見ていなかったが、ひとり康茂才はそのことを知っていた。康茂才は郭英が功績を述べないのを見て、太祖に奏上した。「郭英が一矢で陳友諒を射殺したことこそ、最大の武功でありましょう」。太祖は郭英を振り返り、「茂才は、陳友諒はそちに射落とされたというが、まことか」とたずねると、郭英は叩頭して答えた。

「殿下の天威神算によるもの、それがしに何の功績があ

りましよう（殿下天威神算所致、臣何功焉）

「天威神算」という言葉まで重なるからには、この『皇明開國功臣録』もしくはその系統に連なる資料も、『皇明英烈傳』の制作に関連するものであることは間違いないだろう。

さらに『皇明通紀』は『皇明開國功臣録』を他所では引用していることからすれば、この郭英に關する説については『皇明通紀』は敢えて記さないという判断をしたものであろう。『皇明英烈傳』は『皇明通紀』を参照し、その記述を取り入れながらも、それを補完して功臣の活躍を増やす機會を逃さない。それは今見たように『皇明開國功臣録』のような史書からであることもあるが、他の章回形式の白話小説からの例もあり得る。

『皇明英烈傳』の鄱陽湖の戦いの展開の中で、（A）とした部分は、劉基にふくめられた丁普郎らが、以前仕えていた陳友諒のもとに偽って戻り、内應する策を取る場面であるが、さまざまな史書にこのことは見えない。丁普郎が陳友諒に仕え、鄱陽湖の戦いに先んじて朱元璋に降っていたことは確かだが、この策は史書よりも周知の『三國演義』の赤壁の戦いを模したものである。

一矢、晴を貫く（川）

これが呉將黃蓋が曹操に降り、内應して呉・蜀の連合軍の勝利を助けたことを想起させるのは今さら述べる必要もないだろう。（B）の劉基が船上で天に祈り自軍に有利な風を呼んだことは諸葛亮が七星壇を築いて東南の風を吹かせたことにならったもの。そして、（C）では陳友諒が逃げる途上、禁江の河口にさしかかって部將張定邊を振り返り「劉伯溫（基）の計、亦た未だ奇と爲すに及ばず」と言ったとたん伏兵が現れる。⁽²⁰⁾この展開は、赤壁に破れた曹操が華容道を逃げ走る中、諸葛亮と周倉の策の不備を笑うと伏兵に追われるに似せたものであった。⁽²¹⁾

しかしその中でも（12）にある丁普郎の、奮戦して身に十數の刀傷を受け、首が落ちても劍を離さず直立し、翌日にも倒れなかったというすさまじい死に様は『皇明開國功臣録』にも記され、⁽²²⁾『皇明通紀』にも採られる通りの記述が巧みに組み入れられていることには着目したい。

『皇明英烈傳』と『京本雲合奇蹤』

もう一つ例をみよう。

場面はわずかにうつり、鄱陽湖の戦いの後。武昌に戻った漢の殘軍は陳友諒の長子陳理を第二代の漢王に奉じた。明け

て至正二十四年二月、太祖は武昌に親征、漢を平らげようとする。武昌は難攻であり、東より城を見下ろす高冠山を奪取することが戦略的に必要であった。

『皇明通紀』の記述をまず確認する。

城東有山、名高冠、下瞰城中。上問諸將、誰能奪此。傳友德請先登一鼓奪之。方其奪之也、面中一矢、鏃出腦後。後脇下復中一矢、友德不爲沮。人服其勇⁽¹⁾。僞漢陳同僉者、驍捷善槊、馳入中軍帳下、上方坐胡床疾呼侍衛將郭英殺賊。英躍馬奮臂一呼、賊應手殞⁽²⁾。

この二つの部分のうち、(1)はほとんどそのまま『皇明英烈傳』第三七則「太祖平定武昌郡 豫章建立忠臣祠」に登場する。

定邊乃率兵二萬、屯於高冠山、與我師相列。傳友德當先奪之、面中一矢、鏃出腦後。脇下復中一矢、友德不爲阻⁽²⁴⁾。

それに對して後半はやや複雑である。

英傑卽行、直至太祖營前。縱馬持刀、驟入轅門。眾軍不能當、殺傷數人、營中鼎沸、待眾將安營未定、只有郭英在帳、太祖方坐胡床、英傑逐馳至帳下、太祖大驚逐呼：「郭四爲吾殺賊」。英傑望太祖揮槊刺來。英持鎗、躍馬奮呼直入刺之、英傑應手殞⁽²⁵⁾、郭英用劍梟了首級。太祖大喜、解所御赤幟袍、賜以衣之、曰：「唐之尉遲敬德不過卿也」。郭英頓首謝曰：「此殿下神福天威所致。臣何力之有」。太祖又賜白金五錠、以表其功。郭英啟曰：「卽今可將陳英傑首級、招陳理來降」。太祖曰：「卿言極當」⁽²⁶⁾。

ここでの朱元璋と郭英の行動と會話は、傳友德の行動と異なり、『皇明通紀』のみでは材料が少ない。以下に見る『皇明開國功臣錄』を合わせる必要がある。

理之將陳僉同者、驍捷善槊、馳入中軍帳下、上方坐胡床遽呼曰：「郭四爲吾殺賊」。躍馬一呼、賊應手殞⁽²⁷⁾。上解所御赤戰袍衣之、曰：「唐之尉遲敬德不汝過也」。

この部分に注目すれば、『皇明通紀』も『皇明開國功臣錄』もしくはそれに連なる史書を利用しつつ文を進めていること

が分かる。かつ、『皇明通紀』が『皇明開國功臣錄』と同じ記述によりながらその一部を落とし、郭英の功績についての文を減らしていることも理解されよう。

『皇明英烈傳』はこの部分において、事件の順序についてはほぼ『皇明通紀』によりながら、記事は適時にその間に差しこんでいく、という手法を採っている。さらに郭英が賞されて謙遜する答えはすでに見た陳友諒を射殺したときの言葉をそのまま使ったものである。

『皇明英烈傳』の郭英の活躍は、少なくとも『皇明開國功臣錄』それに連なる文を載せ傳とする史書の記述によれば、郭英は多くの戦場に、それも矢傷槍傷の絶えないほどに最前線で戦い続けたというのであるから、それは必ずしも小説的な誇張とはいえない。『皇明英烈傳』の最終回でもあくまで前線での戦功を認めて「殺伐鏖戦、敢勇爭先、攻城破壘、斬將奪旂者、莫如郭英」という通り、他の將相に比して特に別格に扱われているわけではないのである。

なお、冒頭に引いた郭英の功績のうち、「生擒士誠」、張士誠を生け捕りにしたことは各種の史書はもちろん現存の小説『英烈傳』も沐英の手柄とする。後代の筆記は必ずこれを持ち出し、『英烈傳』の荒唐をとがめるが、その書き手たちは前代

の著述に従うのみで、『皇明英烈傳』あるいは『雲台奇蹤』といった書を読んだ上での發言ではないことに注意すべきである。

もし、郭勛によって作られた書があり、それが政治的な意圖で作られたものであり、かつ郭英が張士誠を捕らえてさえたとするなら、現存する小説『英烈傳』とは関わりがない、とすら言えよう。いづれにせよ現存する歴史小説『英烈傳』の各種版本と言説の中で政治的に扱われる『英烈傳』の距離はかなり離れて見なければなるまい。

これとは逆に、『皇明通紀』のほうが郭英の活躍する記述を減らしているのは、政治的な理由、つまりそれが中央におけるものであり、陳建が廣東でその著述を行っていたにせよ、郭勛が巻き起こした政争によるものである可能性がある。陳建の『皇明啓運錄』、つまり『皇明通紀』朱元璋時代部分の執筆はおそらく嘉靖二十年代後半、いかにも郭勛が刑死した時期に近い。

では、この部分を後發と考えられる『京本雲台奇蹤』によって見てみよう。

(英傑)便縱馬持刀，直入轅門。國公方纔定坐在胡床上，

只見英傑徑至帳中，國公大驚，止有郭英在帳中，便叫：「郭四爲我殺賊」。那英傑徑對太祖刺將過來。郭英奮呼直入，手起一槍，把英傑登時槊死，將劍梟了首級。國公即解所御赤戰袍，賜與郭英，說：「真是唐之尉遲敬德」。郭英拜受說：「即今可將這賊首級，招陳理來降」。國公聽計。⁽²⁸⁾

ほとんど同じ状況を書いていながら、『京本雲合奇蹤』は『皇明英烈傳』と書き方が異なり、史書にもとづくような表現から遠ざかる。⁽²⁹⁾何が書かれているか、の部分では『皇明英烈傳』に非常に近いが、それをいかに表現するか、という部分で異なるのである。

これは『皇明英烈傳』が讀まれる際に意識され、時によっては参照される書物が史書である、もしくは逆に史書を讀む際に思い起こされ、取り出される書物としてこの『皇明英烈傳』があった、つまり讀解のコードとして作用しあっていたことを指している。またそれは讀者の重なりをも示している。

それに對して『京本雲合奇蹤』を見れば、『皇明通紀』や『皇明開國功臣錄』と『皇明英烈傳』が「何を」語るかとともに「いかに」語るかを字句に至るまで共有しているのに比

して、「何を」を共有していながら、「いかに」語るかの部分で細かく、だが確實に異なっていることが見てとれよう。⁽³⁰⁾

『京本雲合奇蹤』の讀者は、ここで語られるべき戰の展開は知っていても、語られる言説そのものを先取りして知ってはならず、また後から對照することもない。これは小説獨自の讀者の成熟を指してもおり、そのすでに成熟した讀者に向けて『京本雲合奇蹤』が存在していることを示している。

『京本皇明通紀』に限らず、少なくとも萬曆後期以降からは、史書全體に對してこのようなアプローチを取って小説の敘述を進めていくこともできるわけである。

獨立した存在である『雲合奇蹤』の系統に對し、史書、特に『皇明通紀』の名の取り扱いのみ異なる『英武傳』のような版本の存在は、今度は『皇明通紀』出版に関わるものが原因であった、とも豫測される。

『皇明通紀』が禁書とされたことはすでに述べたが、『皇明通紀』が異本を多く持った理由の一つはこれによるものである。『皇明通紀』というタイトルを隠し、別の著者を擬した版本もあった。

状況から見れば、『皇明通紀』の書名を載せない版本を作ることとは歴史小説『英烈傳』がより安全に生き残るための一

つの戦略として残されたものであったのではないか。⁽³¹⁾

おわりに

陳友諒を射殺した、とされる矢が誰の弓から放たれたか、亂戦の中とて分かるはずもない。『明史』がそれを「流矢」のしわざとするのはまことに穩當である。⁽³²⁾だが矢を一人の武將が放ったとする説があったこと、そしてそれが郭英であったことは、さまざまな思惑を生み、それぞれの書物が郭英の記事をいかに扱うか、いかに語るかに反映されている。極端な例を挙げよう。武定侯郭勛が残した書物のうち現在も手に取りやすい『三家世典』は文はほぼ『開國功臣錄』に據り、元勳たる徐達、沐英と郭英を並び稱する。しかし李贄『續藏書』は「開國功臣」に鄱陽湖で朱元璋の身代わりとなって死んだ韓成の傳をも立てながら、郭英については黙して語らないのである。

『皇明通紀』はその出版状況と、それを扱う言説の多さから見て、非常に多くのかつ範圍も廣い讀者を得ていたことは疑いない。また、特に朱元璋の事跡を扱った部分は詳細であるため、明らかに読み物としての娛樂性を備えており、それが讀者の獲得に役立ったことも確かであろう。しかし郭英に

ついては、他の人物や事柄に對する扱いと異なり、慎重である。また『資治通鑑』の體例を襲おうとしながらも、ときに不完全であり、記事を繋ぎ合わせる必要がある。

『皇明英烈傳』は現在その姿を見るかぎり、『皇明通紀』を大きな軸として、『三國演義』に代表される先行の章回形式の小説の展開と行文を入れる。さらに郭英の記事のように『皇明通紀』があえて取らなかった説や落とした記述を持つさまざまな書物を組み合わせてもいる。

嘉靖から萬曆に存在している「通史」的な書物としては、むしろ『皇明通紀』が代表的なものではあるが、そうした性質からすれば、現在見られる小説『英烈傳』のさまざまな版本が國初の紀事を記した書物として、いかがわしく思われながらも他の史書と異なる位置を占めた独自のテキストとしてある讀者たちに讀まれていたことはじゅうぶん考えられる。

小説を讀むとき史書によって「史實」を補い、史書を讀むとき資料の一つとして小説が存在する、という相互の關係がそこに成り立ち、互いに機能しあっていたのであろう。

そして二者の關係が相互的なものであることを證するかのようには、『皇明通紀』と『英烈傳』の關係は、『皇明通紀』から『英烈傳』へ、という一方通行の流れにはとどまらなかった。

た。『皇明通紀』が非常に豊富なヴァリエーションを持つことはすでに述べたが、その中の一つ、『新鐫李卓吾先生增補批點正續合併通紀統宗』と呼ばれる版本の系統には、「正文」である『皇明通紀』のテキストに、「續」文として小説『英烈傳』の文章が挿入されている。⁽³³⁾その上、『新鐫——』は「續」文として小説『英烈傳』を引きつつも、件の郭英の部分については載せない。『皇明通紀』を補完するための史料として『英烈傳』を用いながらも、そこにある一線を畫すのである。

後に、この二書の関係は日本にまで至る。『皇明通紀』は和刻本が出版されたが、それは陳建の著作した原型を留める版本ではなく、この『新鐫李卓吾先生增補批點正續合併通紀統宗』を底本とするものであった。さらに冒頭にも述べた通り、岡島冠山の手になる翻譯が出版されたが、その二つの出版は同じ京都の書肆、林義瑞によるものである。

史書『皇明通紀』と歴史小説『英烈傳』は書物として出版された後、テキストにおける語りのレヴェルにおいて影響をおよぼすほどに深く関わり合ってきた。その経過を考えれば『皇明通紀』を翻刻し、それを補うものとして翻譯『通俗皇明英烈傳』を世に出したこの出版は、まことに的を射たもの

であった。

付：題「一矢晴を貫く」は清初の尤侗が明一代の大事を百首に詠じた『擬明史樂府』の第二首、朱元璋と陳友諒の戦いをうたう「鄱陽湖」に「眞人 手づから挽く 金僕姑 一矢 晴を貫き 頭髓を殞す」とあるによった。なお福本雅一監修・尤侗研究會譯注による尤侗『擬明史樂府』譯注（二）（中國詩文論叢第二十一集・二〇〇二年十二月）に「鄱陽湖」全文および譯注が掲載済。筆者の文責である。

本論文は二〇〇四年度早稲田大學特定課題研究（課題番號2004B-827）の成果の一部である。

注

- (1) 『今言』北京・中華書局一九八四、五卷六。原文：嘉靖十六年丁酉、郭勛欲進祀其立功之祖武定侯英於太廟、乃倣三國志俗説及水滸傳爲國朝英烈記、言生擒士誠、射殺友諒皆英之功。
- (2) 天一閣に十二集六十卷の『國朝英烈記』なる書物が存することを仄聞するが、いま見る術を持たない。
- (3) 『今言』の他にも明代には明郎瑛『七修類稿』、明沈國元『皇明從信錄』、『野獲篇』がこの説をとり、のち清では王士禎『池北偶談』などもこれを載せる。

(4) 語り (narrating)。物語内容 (story) に對する物語言説としての narrating も意識する。

(5) 内閣文庫蔵の同書による。版本は既見だが本論では主に『古本小説集成』上海・上海古籍出版社一九九〇所收の影印によった。

(6) 後に詳述するが、基本的に『皇明英烈傳』が屬するグループと『京本雲合奇蹤』が屬するグループは異なる版本の系統ではなく異なる小説作品として捉えるべきである。しかし現在『英烈傳』と題される排印の諸本は全ていづれかの『雲合奇蹤』のグループに據るものである。本論ではこのいづれも『英烈傳』と呼びうる小説の總稱として歴史小説『英烈傳』と書く。

(7) 徳田武『日本近世小説と中國小説』東京・青裳堂書店一九八七・五第四章『通俗元明軍談』と『英烈傳』は岡島冠山の翻譯態度について詳しく述べる。

(8) 内閣文庫蔵、北京國家圖書館蔵の同版本を目睹したが、全體は『古本小説集成』所收の日光輪王寺慈眼堂本による。なお版面、特に挿畫の状態から北京、内閣、日光の順で後印と思われる。

(9) 『皇明英烈傳』文中に明示されている引用文獻は以下の通り (登場順)。皇明通紀・皇明啓運錄・舊本英烈傳 (舊本)・原本英烈傳 (原本)・今獻彙言 (金獻彙言・獻言)・西樵野記・聖政記 (政記)・遵聞錄・本傳。この他にも「按」とだけあ

一矢、睛を貫く (川)

る箇所、「史臣 (史官) 論曰」とされる部分も存在し、以上には引用文獻名と合っている部分も合っていない部分もある。また「本傳」は「皇明開國功臣錄」ほか複數の原書を持つ可能性がある。

(10) 「舊本英烈傳」、さらに「原本英烈傳」と記載される書物が同一か、またどのような書物であるかについて考える材料を現在筆者は持たない。前述の郭勛『國朝英烈記』との關係も不明。ただし、『皇明英烈傳』の全體から見ると、『舊本』、『原本』の文が残っている部分は非常に少ないと考えざるをえない。

(11) この各卷冒頭の紀年は、『唐書志傳』や『大宋中興通俗演義』の一部版本に共通する。高津孝「按鑑考」鹿大史學三九號一九九一により指摘済み。

(12) 「按皇明通紀演義」。朱恆夫「關於《英烈傳》的作者、演變與它的藝術性」明清小說研究一九九五・一期のように「按ずるに『皇明通紀演義』に」と讀む可能性も今のところ無しとはしないが、大塚秀高「嘉靖定本から萬曆新本へ：熊大木と英烈・忠義を端緒として」東洋文化研究所紀要第一二四冊一九九四の説く通り「皇明通紀」に按じて演義す」と讀むのに理があろう。

(13) 『皇明通紀』の引用は全書で十二箇所。さらに「按皇明通紀論曰」とされる二箇所はいずれも本文ではなく陳建の按語を指す。引用の正確さをうかがえよう。

中國文學研究 第三十期

- (14) 『皇明英烈傳』と『英武傳』に關しては、詩や、版面上で資料名を枠に圍まれる形で引かれた資料については前掲大塚一九九四がすでに指摘している。

- (15) 以下、『皇明通紀』については『皇明資治通紀三種』所收の萬曆刊本を底本として用いる。北京國家圖書館、內閣文庫所藏の各種版本と內閣文庫所藏の朝鮮古活字版『皇明啓運錄』を目録、参照している。なおこの『皇明啓運錄』は一度『皇明資治通紀』として刊行された後、再度獨立させたものとなる。

- (16) 『皇明通紀』については山形大學の新宮學教授より快く資料を提供いただいた。特に記して謝す。

- (17) 『皇明通紀』が『資治通鑑』にならって作られていることからすれば、前掲高津一九九一が指摘する『資治通鑑』や『續資治通鑑』などの書物と「按鑑」と題する一群の小説の關係と、ここでの『皇明通紀』と『英烈傳』の關係はパラレルなものがあるといえよう。

- (18) 『皇明開國功臣錄』卷十六韓成傳。以下、『皇明開國功臣錄』は『明人傳記資料叢刊』所收の正徳二年刊本影印による。原文：上親征大戰鄱陽湖。自戊子至庚寅三勝後，復一戰。交鋒既久，賊衆不退，因被圍一時，群將計無所出。上方設奇，成進曰：「臣聞有古人殺身以成仁者。臣敢不辭也」。遂賜成龍袍冠冕與上服同，對賊衆，投水中。

- (19) 『皇明開國功臣錄』卷十二郭英傳。原文：已友諒中流矢而

死，有言英之功者。上問之，英曰：天威神算，臣何力焉。上益重之。

- (20) ここで岡島冠山の『通俗皇明英烈傳』は「陳友諒呵々と大いに笑つて曰く」と『三國演義』の曹操と同じく大笑させているが、『皇明英烈傳』、『英武傳』その他の版で「笑」の文字は見えない。岡島冠山が『三國演義』にならったものか、據った版にその字があったかは知れぬ。

- (21) (A)と(C)は『三國志平話』にすでに見られるが(D)はそのディティールから『三國演義』に據ったとおぼしい。

- (22) 『皇明開國功臣錄』卷十九。

- (23) 訓讀：城東に山有り、高冠と名づけ、下に城中を瞰る。上諸將に問ふ、誰か能く此れを奪はんと。傳友德請ひて先登し、一鼓にして之を奪はんと。方に其の之を奪はんとする也、面一矢に中り、鏃、腦後に出づ。後、脇下復た一矢に中るも、友德、沮と爲さず。人其の勇に服す。僞漢の陳同僉なる者、驍捷にして槊を善くす。中軍の帳下に馳せ入る。上方に胡床に坐すに、侍衛の將、郭英を疾呼し、賊を殺さしむ。英、鎗を持し馬を躍らせ臂を奮いて一呼し、賊手に應じて殞墜す。

- (24) 譯：張定邊は二萬の兵を率いて、高冠山に陣を置き、我が軍と對峙した。傳友德は先鋒としてこれにあたり、顔に矢を受け、やじりは頭を貫いて突き出、また胴にも矢が当たったが、傳友德はものともしなかった。

(25) 『英武傳』ではこの部分に詩が加わる。原文：有說英傑詩曰。英傑無知太不良，直衝營寨恣猖狂。本期關羽單刀勇，反作荊軻一命亡。郭英刺死陳英傑，用劍梟了首級。て予言を成した。

(26) 譯：陳英傑はただちに出發、朱元璋の陣に攻め入る。刀を携え馬を馳せ、軍陣の門に突入した。朱軍の軍勢はその勢いを止められず、數人が切り伏せられ、陣中はわっと沸いた。將軍たちはまだ陣にたどりつかず、郭英だけが陣幕の中に待っていた。朱元璋がちょうど床机に腰を下ろしたところに、陳英傑が陣幕のもとに馳せ入った。朱元璋が驚き、「郭四よ、吾がために賊を殺せ」と叫ぶ。陳英傑は朱元璋を見るや槊をふるって突き入る。郭英は槍を持ち、馬を走らせ聲を勵ましてまっすぐに突くと、陳英傑を一手で落馬させ、劍で陳英傑の首級を上げた。朱元璋は喜び、自らの赤い戰袍を脱ぎ、郭英に着せ掛けた。「唐の尉遲敬徳も、そちには及ぶまい」。郭英は頭を垂れてこれを謝した。「これは殿下の神福天威によるもの。それがしに何の力がありましよう」。朱元璋はさらに白金五錠を賜い、その功に報いた。郭英が奏上する。「いま陳英傑の首級をあげたからには、陳理に降伏を勧めるべきかと」。朱元璋はこれに「そちの言、もっとも」と答えた。

(27) 『皇明開國功臣錄』卷十二郭英傳。
(28) 『京本雲台奇蹤』第四十則。譯は省略する。

一矢、晴を貫く(川)

(29) 『京本雲台奇蹤』の系列では朱元璋を「公子」、「國公」、「吳王」、「太祖」とそれぞれの時期に應じて表記を分けている。

(30) 『京本雲台奇蹤』が『皇明英烈傳』よりも史書の記事を多く採る場合もある。たとえばことに朱元璋の前に現れて豫言を成した奇人、周顛は『皇明英烈傳』には第三七則の注釋の中にしか登場しないが、『京本雲台奇蹤』では重要な人物である。

(31) 本稿でふれる紙幅がなかったが、歴史小説『英烈傳』の現存版本は確認できるだけでさらに數種ある。そのうち、英國圖書館藏『全像演義皇明英烈傳』四卷六十則本殘本一卷はすでに『古本小說集成』に影印本があり、北京圖書館(一種・上海圖書館等藏の『皇明英烈志傳』四卷六十則本は目録。どちらとも『皇明英烈傳』よりは『英武傳』に似、『全像』はわずかに「按皇明通紀演義」の部分のみ『皇明通紀』の書名を残し、『皇明』には『皇明通紀』の書名は見えない。版本の確認と系統の整理は以降に期したい。

(32) 『明史』卷二三陳友諒傳。

(33) 『皇明通紀述異』など他書も「續」文として書名の挙げられないまま挿入される。前掲の徳田一九八七によれば挿入される小説の文はより『英武傳』に似るとするが、これについてはまた稿を改めて論じる機会があろう。